調査報告

国宝　普勧坐禅儀を収納する散蓮華蒔絵経箱

宮武慶之

論文要旨

現在、大本山永平寺が所蔵する道元（一二〇〇―一二五三）による自筆の「普勧坐禅儀」は、坐禅の在り方を述べた書として国宝に指定される。「普勧坐禅儀」は嘉永五年（一八五二）に古筆了伴（一七九〇―一八五三）により永平寺に寄進され、今日に至っている。

「普勧坐禅儀」を収納する「散蓮華蒔絵経箱」は中山胡民（一八七〇没）の作によるが、これまでの研究では注目されてこなかった。

大本山永平寺の協力のもと調査を行ったところ、了伴は寄進に際して、江戸の名畑鋼二郎に表装を依頼し、さらには収納する「散蓮華蒔絵経箱」を胡民に依頼していたことを確認した。「普勧坐禅儀」の表装に用いられた料紙や、軸先の金具などの随所には、蓮の意匠が用いられている。この点から了伴は蓮の意匠を重視していた形跡が認められる。

そこで本稿では「普勧坐禅儀」の表装および収納する「散蓮華蒔絵経箱」の意匠である蓮を検討すると共に、了伴と胡民との関係についても明らかにする。

キーワード【普勧坐禅儀、散蓮華蒔絵経箱、中山胡民、永平寺、古筆了伴】

一　はじめに

筆者は『人文（十五号）』で江戸時代後期から明治期に活躍した蒔絵師中山胡民（一八七〇没）と新発田藩十代藩主溝口直諒（翠濤／一七九九―一八五八。以下翠濤に統一）、江戸の町人数寄者吉村観阿（白醉庵／一七六五―一八四八。以下観阿に統一）、その妻である観勢（田鶴／一七八一生）との関係を明らかにした[1]。

特に注目したのは観勢が年賀の祝いの品として胡民作「村雲蒔絵盃」を翠濤に献上していた点である。なおこの盃について『人文（十五号）』で、高尾曜氏から資料の提供を受け、『漆器図録』第二十七号の付録と紹介したが、正しくは『日本漆工会雑誌』附録の「漆器図録」に所載されているため、訂正しておく。

観阿は天保十五年に自身の八十賀茶会の記念品として「一閑桃之

絵細棗」（個人蔵）を胡民の師である原羊遊斎（更山／一七六九―一八四五）に依頼していた。また観阿は羊遊斎の若い頃を支援しており、観勢は胡民に依頼して「立鶴一文字香合」（個人蔵）を百個作成していた。これらの点から観阿夫婦は羊遊斎と胡民師弟を支援していたものと結論した。その後の調査から観勢の箱墨書のある同様の香合を江戸千家が所蔵していることが判明した。作品は前回紹介した個人蔵品と同一であり、箱墨書には観勢により「為白醉庵観阿」との墨書がある。個人蔵品には箱底裏に「百之内」と書かれていたが、江戸千家蔵品には書かれておらず、その員外でありかつ、その本歌と推測される。

ところで翠濤と観阿の交流を考えるとき、大徳寺開山である大燈国師（宗峰妙超／一二八二―一三三八）による墨蹟「日山之賦」（ＭＩＨＯ ＭＵＳＥＵＭ蔵）[2]と、男山八幡宮伝来の額「鼈」[3]は、はじめ古筆家十代目の古筆了伴（最恒／一七九〇―一八五三）が所蔵したが観阿の取り次ぎにより翠濤が入手した作品である。そこで改めて了伴と胡民の関係について注目するとき、現在、大本山永平寺が所蔵する道元（一二〇〇―一二五三）による自筆の「普勧坐禅儀」（国宝。図1）を収納する蓮の蒔絵がなされた塗箱がある。本稿では便宜上、この塗箱を「散蓮華蒔絵経箱」（図2）と称する。

「普勧坐禅儀」は当初、興聖寺に伝わったと推定されるが、その後は流出した。というのも永平寺が当初から所蔵した訳ではなく、後述するように嘉永五年七月に了伴によって永平寺に寄進され、現在まで同寺に伝わっている。

「普勧坐禅儀」の内容については従来様々な論考があるものの、こと作品を収納する散蓮華蒔絵経箱については、『永平寺史料全書（禅籍編第一巻）』（二〇〇二年、永平寺）で解説を担当した高橋秀栄氏は次のように紹介している。

> 肉眼ではしかと読みとることはできないが、内箱の底裏には「法橋胡民造」という微細な文字が判読できると粟野俊之氏が報じてくれた。法橋胡民の素性は明らかではないが、漆塗の内箱の作者かと推察される。[4]

このほか「普勧坐禅儀」は平成二十三年より国庫補助事業として修理がなされた際、修理を担当した坂田墨珠堂によりその報告書が作成された。[5]また同社の佐味義之氏により修理の内容を『傘松（第八三六号）』で紹介している。[6]佐味氏によれば軸木には了伴と名畑鋼次郎（生没年不詳）の署名があることおよび、塗箱の底裏に「法橋胡民造」の署名があることを紹介している。しかしながらその後の研究で、本経箱についての詳しい論考は見当たらない。

幸い大本山永平寺の協力のもと「普勧坐禅儀」および付属品、収納する「散蓮華蒔絵経箱」を調査することができた。巻子となった「普勧坐禅儀」の随所は、蓮の意匠が用いられている。この意匠は了伴によって取り入れられたと考えられ、巻子を収納する「散蓮華

蒔絵経箱」の意匠を考える上でも重要と思われる。またその他の作品および胡民の師である羊遊斎と了伴の関係も含め、本稿では「散蓮華蒔絵経箱」の詳細、了伴と胡民の関係について検討を加えたい。

二　道元筆「普勧坐禅儀」と「散蓮華蒔絵経箱」

鎌倉時代初期に活躍した禅僧で、永平寺開山である道元（諡号は仏性伝燈国師、承陽大師）は貞応二年（一二二三）に博多から南宋に渡り諸山を巡って修行を行い、宝慶元年（一二二五）天童如浄の身心脱落の法話を聞き悟るところがあった。そのため中国曹洞禅の只管打坐の禅を如浄から受け継いだとされる。安貞二年（一二二八）に日本に帰国し、天福元年（一二三三）には京都深草に興聖寺を開き、その後、坐禅について、その宗教的な意義や方法を表したのが「普勧坐禅儀」である。

道元筆「普勧坐禅儀」は中国製の竹の繊維を多く含んだ和紙七枚を継ぎ、七百五十六文字で書かれたものである。その筆跡は坐禅を広めることへのひたむきな心と、入念な心持ちのため起筆から終筆に至るまで謹直書かれ緊張感がみなぎっている。昭和二十七年に国宝に指定される。

「普勧坐禅儀」の由来については道元による自筆の墨蹟「普勧坐禅儀撰述由来」（永平寺蔵）がある。竹内道雄（一九二二―二〇一四）による『道元』（一九六二年、吉川弘文館）では「普勧坐禅儀撰述由来」から由来を次のように述べられている。

> 北宋末の崇寧二年（一一〇三）長蘆山の宗賾の撰述とされる『禅苑清規』を修訂して、初めての禅林の規矩『百丈清規』を作った百丈懐海（七四九―八一四）の古意を復活し、正しい坐禅行法を示して達磨禅の真風を宣揚しようとしたものである。(7)

また、「普勧坐禅儀」の内容について同氏は次のように紹介している。

> 初めに前掲のように深遠な仏法の真理を法と人の上から論じ、そのあと、現実の差別世界を超えて仏法の境界に悟入するためには、釈尊の六年端坐、達磨の九歳面壁の蹤跡を慕い、坐禅につとむべきことを説いている。つぎに宗賾の『坐禅儀』に範をとりつつ坐禅の根本的心得におよび、参禅は、静かな部屋で飲食を適切にとって、「諸縁を放捨し、万事を休息し、善悪を思はず、是非を管すること」なく、「心意識の運転を停め、念想観の測量を止めよ」とのべる。その具体的な方法については、「右の足をもって左の脾の上に安じ、左の足を右のの上に安ず」る結跏趺坐と、「ただ左の足をもって右の脾を圧す」半跏趺坐の二方法を示し、行住坐臥、一挙手一投足にいたるまで詳細綿密に教示している。そしてその功徳については、坐禅は「大安

楽の法門」であるとし、もしその真意を会得すれば、「寂然清楽」、精神爽快となり、竜が水を得、虎が山に靠るような偉大な法力を発揚できると説いている。またそれ故に禅定は、最高の勝れた法門であり、しかも「上智下愚を論ぜず、利人・鈍者を簡ぶこと」なく、誰でも実践できる易行道であるとして、坐禅の絶対性と普遍性を強調したのであった。その文体は、歴史的な禅的用語を自由に駆使した四六駢儷体であって、その格調は後人の追随を許さない高さをもっている(8)。

ここで表装と付属品に注目する。表装に使用されている紙は料紙で、金銀の砂子で雲の意匠が描かれ、そこに散蓮華が金泥および銀泥で描かれている（図3）。実見すると、一文字の部分も同手の紙であるが、微かに金泥が敷かれている（図4）。また散蓮華であるが、こちらは見返し部分のものと比較して幾分か小さく金泥及び銀泥で蓮弁が描かれている。なお表地の裂は二重蔓唐草金襴が用いられている。

「普勧坐禅儀」の巻末も、見返し同様の料紙で、了伴による極が次のように書かれている。

道元禅師之御真筆　　寄進
無疑者也　　古筆了伴
印

表装は平成二十三年より同二十五年にかけて改修がなされた。改修を担当した佐味義之氏による修復の過程について冒頭で紹介した『傘松』に詳しいが、ここでは軸木（図5）について触れておきたい。佐味氏によれば旧軸木は割軸となっており、割木上には次のような墨書があると報告している(9)。

嘉永五壬子年七月吉日　永平寺寄進　古筆了伴　花押

さらに割木下には次のような墨書がある。

嘉永五壬子年七月二十二日出来　江都下谷山下辻番舗丁　経師
名畑鋼次郎　花押

この点から、了伴は寄進に際しての表装を名畑鋼次郎に依頼していることが確認できる。鋼次郎の息子である名畑順二郎（一八六二生）について『現代人名事典』（一九一二年、中央通信社）に記載があり、そこに父鋼次郎についても次のように触れられている。

君は表具師なり、東京の人名畑鋼次郎氏の二男にして文久二年九月六日を以て現所に生る、厳君鋼次郎氏幼にして京都に出で同地に於て表具工芸の研究に従ふもの多年造詣深く、且つ絵画

の趣味に富み就中南画に堪能なり、業卒へて暫く関西地方を漫遊して弘化年間東京に帰り来り現在地に於て表具の業を開始せり、当時東京に於て京都式表装を為すもの絶無にして全く氏を以て之れが嚆矢と為す、君幼より厳君の膝下に在りて鍛錬に力め夙に出藍の技を具ふると共に、厳君の遺風を受けて性絵画を好み、一般表具師と全然趣を異にし、襖、屏風の如きは其本領に非ず、専ら古物の表具表装を以て得意とし、此点に於て超凡の妙技を有せり、夫人をうめ子と呼び四男あり、蜂須賀侯、藤堂家には特に愛顧を蒙れり（下谷区車坂町四三）[10]

鋼次郎の表装は古物にかけては妙手であったことがわかる。了伴が改修する以前の「普勧坐禅儀」の表装がどのようなものであったのかは確認できないが、了伴の意図のもと鋼次郎による改修がなされ、永平寺に寄進されたことがわかる。

「普勧坐禅儀」には古筆鑑定家の二代目畠山牛庵（義高／一六二五―一六九三）による極（寛文六年）、古筆鑑定家の川勝宗久（生没年不詳）による極（享保十三年）のほか了伴による極（嘉永五年）が付属する。これらの包紙の甲墨書を確認したところ、いずれも了伴による筆跡である。また「普勧坐禅儀」には了伴による次のような添状が付属する（図6）。

道元禅師真跡普勧座（ママ）
禅儀一巻年来私所持
仕候所此度御當山江寄進
仕度奉存候尤右品寄進
仕候ニ付外ニ願ケ間敷儀毛頭
無之候此段宜敷奉願上候
以上
子
七月　古筆了伴 印
永平寺様
御役僧衆中

了伴が嘉永五年七月、道元の開山忌につき自身が所持した「普勧坐禅儀」を寄進したことがわかる。了伴は翌年に没しており晩年の行状を知る上でも重要である。

「普勧坐禅儀」を収納する「散蓮華蒔絵経箱」及び、総箱として錠前付きの塗箱がある。総箱の甲には了伴による墨書で

普勧坐禅儀　道元禅師真跡

とあり、蓋裏には

紙墨付七枚　　寄進
一巻　文字御判共ニ　　古筆了伴
九百十六字
嘉永五子年八月

とある。

「普勧坐禅儀」を収納する蓮の蒔絵が施された「散蓮華蒔絵経箱」（図2。再出）は真塗で、裏側および底は梨地である。口にも金で縁取りされている。箱甲および側面には散蓮華の高蒔絵がなされ、葉脈は三本乃至四本で、これは当初から蒔絵されたものであり、掻かれたものではない。

蓋甲には散蓮華十二枚が蒔絵され、了伴による字形で

道元禅師真蹟

と金蒔絵される。縁にも六ヶ所ほど細かな蒔絵がなされる。蓋裏の梨地に金蒔絵で

普勧坐禅儀　　寄進　　古筆了伴（花押）

とある。そこでこの塗箱に注目すると、箱底裏（図7）には

法橋胡民造

と高蒔絵で書かれており、胡民の作であることが改めて確認することができる。

ここで散蓮華の意匠に注目したい。散蓮華は単調なものと捻られたものが組み合わされている（図8）。先述のように本紙の表装には金泥および銀泥で見返しなどには大きな散蓮華を、一文字に相当する部分には小さな散蓮華を配していたが、これも単調および捻りの散蓮華が配されていた。

「散蓮華蒔絵経箱」の紐を結ぶ銀で作られた金具（図8）は十六花弁の菊に作られ、そこには青貝が敷かれている。この意匠はそのまま巻子の軸先（図10）にも用いられ、さらに側面には散蓮華の彫りがある（図11）。

以上の点から了伴は表装及び塗箱の次第を整えるに際して、散蓮華を意匠に用いて依頼したものと考えられる。

そこで道元と蓮との関係に注目するとき、肥前平戸藩九代藩主松浦清（静山／一七六〇―一八四一）による随筆『甲子夜話（五十三巻）』では、蓮について先年の伝聞を次のような記録している。

何つの頃なりしか、某西土に渡り帰国せんとして普陀山の寺に滞留せし間に、仏宇にて古き如意を見る。柄に記して云く。日本国沙門道元と。某思ふに、これ永平の開山入宋のときの物な

るべきを、帰舶のとき定めし遺嘱し所ならん。何かにも尚ぶべき者と携へ還りしが、固より積年の物ゆゑ、如意、首離れ落たり。某見るに、その中を虚にして小き袋を容れたり。某あやしみ思ひて覩れば、題して、廬山白蓮実とあり。乃袋中をみるに、果して蓮実二つ有り。某奇異の思をなし、これを池中に蒔たるに、明年青銭を生じ、新葉盛茂して、花を発するに皆白蓮なり。さすれば、道元、廬山に詣でゝ親しくその実を得たるならんと。其池ある所は長州の某寺なるが、其名も失念せり。今猶この蓮種、長州には連綿たりと云。廬山白蓮社恵遠禅師は『仏祖統紀』に、東晋義熙十二年寂八十三とあり。自此年文政七年まで千四百九年。又道元の入宋は『高僧伝』に貞応二年と見へ、安貞元年帰朝とあれば、自今五百九十八年にして、吾が後掘河の朝、西土は宋の理宗の時なり。古き者にぞ有るなれ。(11)

静山によれば、中国大陸に修行を終えた僧が帰国に際し、浙江省東端の普陀山において古い如意があった。その柄には日本国沙門道元と書かれており、道永平寺開山道元のものと知れた。この如意を携え帰国しようとしたが、古物であったため、先端の部分の首が取れてしまったが、その中に小さな袋があった。袋には廬山白蓮実と書かれており、二粒の種が入っていた。この種は道元が廬山に詣でた時に得たものであった。僧が地中に植えると白蓮が開花した。この白蓮はその後、長州の寺院で受け継がれていると述べられている。

以上のことから、蓮は仏教との結びつきから意匠として用いられることが多いことに加え、道元と蓮との関係を考えた場合、蓮の意匠は道元が帰朝に際して蓮の花を持ち帰ったとする故事と意を重ねて用いられたものと考えられる。

三　了伴と胡民の周辺

ここでは了伴と胡民の関係性の深い作品を提示してその周辺を明らかにする。

大名物唐物肩衝茶入銘「松山」（東京国立博物館蔵。図12）は『玩貨名物記』で松平右衛門太夫正綱が所持したとされ、その後、正信が跡を継ぎ備前守となったため松平備前守家に伝来した。正信の子である正久の代になり、元禄九年から正徳四年の間に、江戸の奈良屋源七（神田安休）に金四千両で売却される。奈良屋は文政十二年三月二十一日の神田佐久間町の火事で被災し、茶入も消失したが破片を集められ、後述するように了伴の仲介によって修理がなされる。(12)

茶入を収納する挽家などの次第に注目する。挽家には小堀正優（宗中／一七八六―一八六七）による金粉字形で「松山」とある（図13）。収納する箱には「松山肩衝」と同じく宗中による墨書がみられる。

了伴と宗中を巡って、その交渉が確認できる早い頃の資料として

売立目録『田村家久原家本入札所蔵品入札』を挙げたい。目録中、「閑極法雲東澗道洵両筆墨蹟」と溝口翠濤添状も所載されており、添状には次のような記述がある。

小堀梅之助殿同年十月廿八日口切茶にて相招候節ニ申候は手留にも有之御軸ニて候、何方へ納候也トかねて不分に存じ居候、所今日拝見難有く存候箱書松花堂ト扣に有之候、同日古筆了伴も相招同人申候ニは箱書松花堂に相違無之御見事ニニて候、此両筆は至而まれなる御品ニ覚候[13]

添状の日付は文政一三年十月二八日付。文面から、直諒が同年の口切茶会を開催し、客に小堀宗中、古筆了伴らを招いたことがわかり、了伴と宗中はこの当時から交流のあったことが知れる。

さて茶入を収納する箱は春慶塗、朱漆で「松山肩衝」とあり、箱の胴面には朱漆で次のような書付がある。

此肩衝ハ年来奈良屋源次郎方ニ
所持之処惜むへし去ル文政十二丑年
三月廿一日大火之時焼失せし跡ニて茶入
のかけを尋出し置けるか茶入のかけ四
分不足せり此度我等上京之序預り
登りて谷松屋宗朝ニ相談せしに昔し
松平不昧此肩衝所望して一覧之時
宗朝も側にて能見覚其上表裏之薬
なだれの模様迄つぶさに書写しをかれ
たれば此翁を頼み差図をうけ塗師
近佐と云名人ニ丹精を尽し申付綴合
不足之所ハ木彫にて補ひ薬りなだれ
茶入目方并挽家外箱迄も元の如く
拵え江戸え持帰り小堀宗中ニ箱并挽家
書付頼ミ挽家松山金粉字形ハ蒔絵師
胡民造之全せり奈良屋之子孫ニ永ク
伝へむ事を思ふのミ
古筆了伴（花押）
弘化四未年五月[14]

奈良屋八代目源次郎（一八七四没）が了伴に依頼して補修を依頼したことが知れる。了伴が京へ向かうついでに、かつてこの茶入を松平不昧と共に実見していた京都の道具商谷松屋宗朝（貞八）に所見を求めていたことが知れる。近佐になだれや重さまで再現させ、さらには挽家を作らせた。江戸に戻った了伴は宗中に依頼して甲墨書を書かせ、さらに挽家甲には宗中による字形で「松山」と金蒔絵されている。この金蒔絵の部分が胡民による蒔絵である。この点か

ら全て了伴の主導によるものであることがわかる

次に、現在、個人が所蔵する胡民作「蝨香合」（図14）は蠟色となった一文字の香合である。甲は青貝による螽斯の図柄である。口は錫。内側も甲と同じ蠟色である。この香合には包紙が付属しており、表題には

蝨香合　書付

と書かれ、筆跡から了伴によるものと知れる。中には打雲の鳥の子紙が納められ、次のような墨書がある。

小堀宗甫蝨香合
本家者墨書也以金粉写之
字形相違無之候
　蓋裏書付所持主
　土方峰雪筆
古筆了伴（花押）

裏にも墨書で

法橋胡民作之 印

とあり、胡民の自筆である。

香合を収納する桐箱の甲には、やはり金粉の字形で

蝨香合

とあり、所蔵者である土方峰雪による筆跡であることが知れる。また蓋裏には墨書で

寫　十之内 印

と書かれており、十作のうちの一つであることが知れる。

この香合の本歌は小堀遠州（宗甫／一五七九―一六四七）の所持した香合である「蝨香合」が該当する。当時、土方峰雪[15]が所蔵していた「蛩香合」を写し十作造られたことがわかる。その制作にあたって、峰雪との交渉に応じていたのが了伴と胡民であったと考えられる。

ここで了伴の周辺に注目するとき、胡民の蒔絵の師は羊遊斎である。そこで羊遊斎による「蒔絵下絵帳」（大和文華館蔵）をみると了伴の硯箱の模様を控えた図（図15）が確認できる。この下絵帳の奥書には享和元年とあるが、了伴のそれは後に貼られたものと考えられ、了伴と羊遊斎の交流が確認できる。

羊遊斎は酒井抱一（一七六一―一八二八）による下絵の作品を世

に発表していた。そこで抱一と了伴による交流では文政六年の抱一による『乾山遺墨』の跋文には次のような記述がある。

其頃乾山の墓碑をも尋るに其処を知ものなし年を重京師の人に問と雖さらにしらす此年十月不計して古筆了伴が茶席に招れて其話を聞く深省が墳墓予栖草菴のかたわら叡麓の善養寺に有とゆふ日を待すして行見にそのことの如し塵を払水そゝき香花をなし礼拝して草菴に帰この遺墨を写し置るを文庫のうちより撰出して一小冊となし緒方流の余光をあらはし追福の心をなさんとす于時文政六年癸未十月乾山歳八十一歿てより此年又八十有一年なるも又奇なり(16)

文政六年十月に了伴の茶会に抱一が参会していることがわかり親しく交流したことがわかる。なお了伴の住居について『茶家酔古集（第三編）』（一八四五年）に所収される『古筆鑑定家印譜』(17)によれば京都では小川二条に寓居し、江戸では上野三枚橋詰に住居したことが知れ、抱一が参会した茶会の場所は江戸の屋敷である。すなわち了伴の江戸屋敷で茶の湯を通じた交流がなされていたものと考えられる。また羊遊斎と観阿を巡っては、観阿の八十賀に際し、天保十五年正月から開催された茶会記念品として「一閑桃之絵細棗」を百二十五個作成し、知友に配っていた。さらに観阿と了伴を巡っては、了伴が所持した大燈国師墨蹟「日山之賦」を観阿が取り次ぎ溝口翠濤に売却していた。このことは同墨蹟に付属する溝口翠濤添状を収納する包紙に

此軸、実ニ珍奇之宝物と云へし、殊ニ利休箱書めつらし候、遠州添文宗中被監定願候所正筆無疑旨と申候、文意を案すれは表具は利休好なるへし、了伴秘蔵之軸、天保十五甲辰年七月同人ゟ求之、観阿取次也(18)

とあることから知れる。ここでは天保十五年に添状の一つである遠州の消息を宗中が鑑定し、観阿が取り次いでいることが知れる。冒頭でも紹介したように、翠濤の茶会に招かれ、江戸においては様々な人物との交流が確認できる点からも、江戸の茶の湯文化でも了伴は重要な人物であったことがわかる。

四　むすび

「普勧坐禅儀」を収納する「散蓮華蒔絵経箱」の作成にあたっては、本紙天地の料紙に金泥および銀泥で小さな散蓮華を配し、見返し部分には大きな散蓮華を配していた。また軸先の銀で作られた金具にも散蓮華が彫られている。道元と散蓮華をめぐっては中国での修行を終え帰国に際して持ち帰ったのが蓮の種子であった。その伝承をもとに蓮華を意匠に用いたものである。また仏教と蓮の結びつ

きからも、意を重ねて意匠として用いられたと考えられる。またこれらの表装や塗箱の作成にあたっては寄進者である了伴が名畑鋼次郎および胡民に依頼したものである。

　このような制作の背景には了伴をはじめとする江戸における抱一や観阿との交流の中で、羊遊斎との交流がみられた。そのため羊遊斎の弟子である胡民への作品制作の依頼であり、同時に胡民の位置の高さを示すものであると結論することができる。

謝辞

調査にご協力いただきました大本山永平寺、大和文華館、江戸千家家元川上宗雪氏、国立能楽堂高尾曜氏、ご個人の所蔵家、同志社大学今出川図書館、画像利用にあたりご協力いただきました九州国立博物館に深謝申し上げます。

付記

本研究に関する調査は次の研究助成を受けた。

宮武慶之「近世江戸時代後期の美術品と移動に関する研究―溝口家を起点に―」、平成三〇年度高梨学術奨励基金・若手研究助成（美術史）。

【図版の典拠】

図1、図2、図6、『永平寺史料全書（禅籍編第一巻）』より転載

図3、図4、図7、図8～図11、図14～図15、筆者撮影

図5、『国宝紙本墨書普勧坐禅儀一巻　修理報告書』より転載

図12、図13、九州国立博物館による画像提供

注

（1）宮武慶之「中山胡民作寿字盃について」『人文』十五号、学習院大学人文科学研究所、二〇一六年、二二四―二四〇頁。

（2）宮武慶之「新発田藩溝口家旧蔵の大燈国師墨蹟について―物我両忘と日山賦を中心に―」『文化情報学』第九巻第一号、同志社大学文化情報学会、二〇一三年、九九―一一二頁。

（3）宮武慶之「白醉庵吉村観阿について」『日本研究』第五十四集、二〇一七年、国際日本文化研究センター、三九―七七頁。

（4）大本山永平寺高祖道元禅師七百五十回大遠忌大遠忌事務局、文化事業専門部会、出版班、永平寺古文書編纂委員会編『永平寺史料全書』禅籍編第一巻、二〇〇二年、大本山永平寺、二一頁。

（5）坂田墨朱堂『国宝紙本墨書普勧坐禅儀一巻　修理報告書』平成二十三・二十四年度。

（6）佐味義之「国宝『普勧坐禅儀』一巻の保存修理について」『傘松』八百三十六号、二〇一三年、五二―五六頁。

（7）竹内道雄『道元』、一九六二年、吉川弘文館、一六六頁。

（8）前掲注（7）。竹内道雄『道元』。一六六―一六七頁。

（9）前掲注（6）。佐味義之「『国宝普勧坐禅儀』一巻の保存修理について」、五六頁。

（10）古林亀治郎編『現代人名事典』一九一二年、中央通信社、ナ九三頁。

（11）松浦静山著、中村幸彦、中野三敏校訂『甲子夜話』四巻、平凡社、

一九七八年、五三―五四頁。

（12）高橋箒庵『大正名器鑑』第一編、宝雲舎、一九二一年、一二七―一三〇頁。
なお奈良屋に伝来した後、奈良屋の親戚で日本橋の織物問屋と営んだ新井半兵衛に譲られた。同家では大正五年に東京両国美術倶楽部で売立を行っており、この時、大河内正敏子爵が落札し、再び、大河内家の所蔵に帰したこととなる。

（13）宮武慶之「閑極法雲・東澗道洵両筆墨蹟について」『アート・リサーチ』第十四号、二〇一四年、八九―一〇四頁。

（14）伊藤嘉章「江戸期における茶陶の修理とその思想―唐物肩衝茶入松山肩衝のX線CTスキャン調査の知見から―」『東風西声』第六号、二〇一〇年、九州国立博物館、二一頁。

（15）土方峰雪の筆とするものでは現在、野村美術館が所蔵する中興名物茶入銘「藻塩」に付属する三村清左衛門（道樹）宛の添状があり、次のような記述がある。（高橋義雄編『大正名器鑑』第五編、大正名器鑑編纂所、一九二六年、四九―五一頁。）

藻塩茶入御所望候付、則御譲申候、永く御秘蔵可被成候、追而外へ御譲被成候儀も候ハヽ、此方へ其節は亦々御所望申候、猶其内拝顔に萬々可申候、不備

十二月念五　峰雪

道樹老人

なお、箒庵は峰雪のことを沼津藩家老の土方縫殿助（篷雨／一八六三没）としている。

（16）中野三敏、菊竹淳一編『相見香雨集』第一巻、青裳堂書店、一九八五年、五一七―五一八頁。

（17）湖月輯『茶家醉古集』第三編。大阪府立中之島図書館蔵。資料番号 1516423546。

（18）前掲注（2）。宮武慶之「新発田藩溝口家旧蔵の大燈国師墨蹟について―物我両忘と日山賦を中心に―」。九九頁。

ENGLISH SUMMARY

National treasure Fukanzazengi to store the Chiri-renbenmakie-kyoubako box

MIYATAKE Yoshinori

Currently, *Daibonzan Eiheiji* possesses the "*Fukanzazengi* (*National treasure*)" written by *Dogen* (*1200～1253*). He wrote a work that solved Zen's way. This work was donated by *Kohitsu Ryoban* (*1790～1853*) in *1852*. The box that keeps this work is *Nakayama Komin's* work, but that fact was not known. I conducted an investigation in cooperation with *Daibonzan Eiheiji*. *Ryoban* asked *Nabuta Kojirou* for his furniture and *Komin* for his box when making a donation.

Many lotus designs are seen in the paper and metal fittings used for the tool. So *Ryoban* focused on lotus. In this paper, I will clarify the meaning of the lotus in costumes. the also reveal the relationship between *Ryoban* and *Komin*.

Key Words: Fukanzazengi, Chirirenbenmakiekyoubako, NakayamaKomin, Eiheiji Kohitsu Ryoban



図２　普勧坐禅儀を収納する中山胡民作「散蓮華蒔絵経箱」

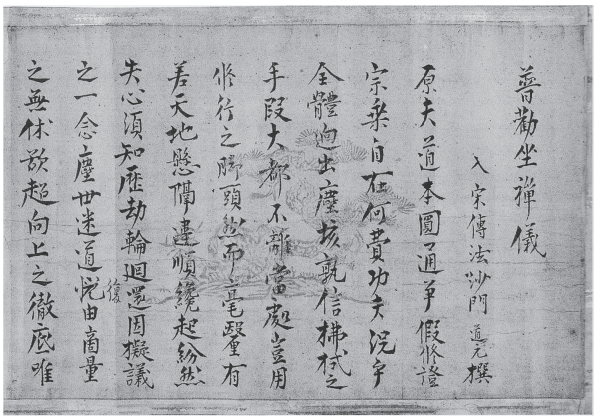

普勧坐禅儀
入宋傳法沙門道元撰
原夫道本圓通爭假修證
宗乘自在何貴功夫況乎
全體迥出塵埃孰信拂拭之
手段大都不離當處豈用
作行之辦頭然布毫髦有
差天地懸隔違順纔起紛然
失心須知陞劫輪迴還同擬議
之一念塵世迷道悅由(復)
之無休欲超向上之徹底唯

図１　普勧坐禅儀（永平寺蔵。国宝）

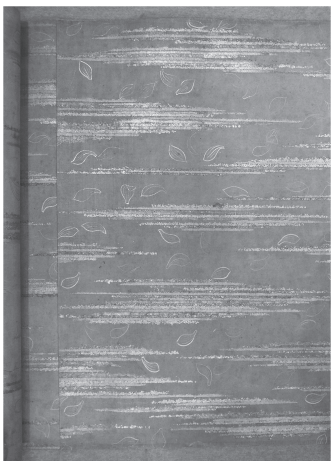


図３　見返（部分）

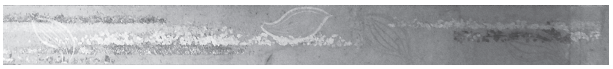


図４　一文字（部分）

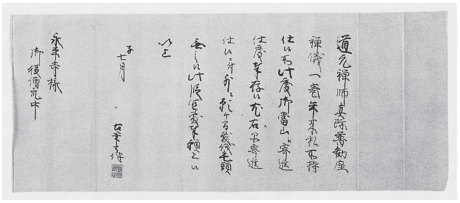


図６　古筆了伴添状



図５　軸木

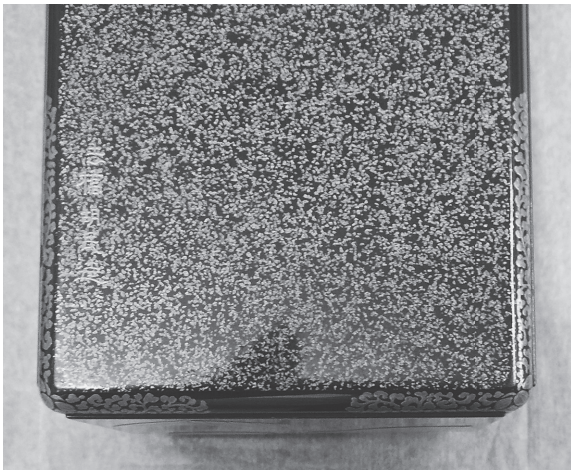


図７　箱底

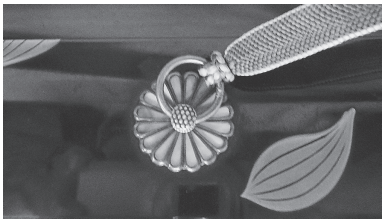


図９　金具



図８「散蓮華蒔絵経箱」の側面



図 11　軸先

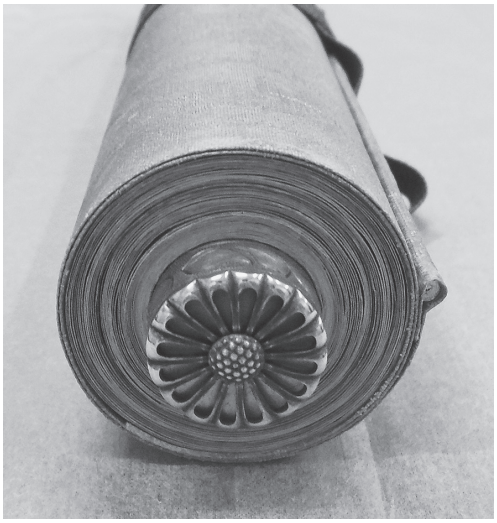


図 10　軸先の青貝



図 12　大名物唐物肩衝茶入銘「松山」
（東京国立博物館蔵　山﨑信一氏撮影）



図 14　中山胡民作「蚕香合」
（個人蔵）



図 13　宗中による「松山」字形の蒔絵
（東京国立博物館蔵　山﨑信一氏撮影）



図 15 『原羊遊斎下絵帳』にみる了伴の
所持した硯の模様
（大和文華館蔵）